

# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の2年目)

## 1. 研究課題

ポスト・パンデミック世界の新しい社会・環境理論に向けて  
New Socio-Environmental Theories for the Post-Pandemic World

## 2. 研究代表者氏名

香西豊子  
Kozai Toyoko

## 3. 研究期間

2021年4月-2024年3月(2年目)

## 4. 研究目的

COVID-19は、世界中の国々の政治や経済のみならず、人々の社会観や自然観に根源的な動揺を与えた。人間社会の差別や経済状況に即して被害が甚大となる構造に加え、乱開発がもたらすウイルスと人間の頻繁な接触に警鐘が鳴らされている。だが、感染症の歴史は蓄積が膨大であるにもかかわらず、人文科学の研究者は新しい社会観や自然観や未来構想を発信できていない。本プロジェクトでは、感染症の歴史の文献、特に百年前のスペイン風邪の一次史料を、今回並びに次回の危機の際利用しやすいように整理、蓄積する。それと同時に、パンデミックに関するオンライン連続講演を発信する。これによって、さまざまな価値が動揺する時代に対応した、社会観や自然観の再構築にむけた人文学知を形成することを目的としている。

COVID-19 has caused fundamental upset not only in the politics and economy of countries around the world, but also in people's views of society and nature. In addition to the structure in which the damage is enormous in line with discrimination and economic conditions in human society, the alarm is being given to the frequent contact between viruses and humans caused by overdevelopment. However, despite the vast amount of history of infectious diseases, humanities researchers have not been able to fully disseminate new views of society, nature, and future plans. In this project, the history of infectious diseases, especially the primary sources of the Spanish flu 100 years ago, will be organized and accumulated for practical use in this and the next pandemic crisis. At the same time, he will send out a series of online lectures on pandemics. In doing so, this project has a try to form the humanistic knowledge for the reconstruction of the integrated social and natural views in response to the times when various values are shaken.

## 5. 本年度の研究実施状況

本年度は一ヶ月に一回のペースで、研究班の班員に発表をしてもらい、来年度の研究報告書作成に向けて、議論を重ねた。とりわけ、コロナパンデミックの時期に宗教法人がどのような対応をしたのかや、日本の水際対策、SNS での感染症をめぐる言説分析など、新しい論点も登場した。また、研究会の報告の一環として、2022年10月28日に、附置研究所・センター会議 第3部会 シンポジウム「感染症と近代社会」で班長の香西豊子と副班長の藤原辰史がそれぞれ成果の一部を発表した。

## 6. 本年度の研究実施内容

2022-04-18 パンデミック第16回研究会 ランダムからの秩序の抽出～『生命らしさ』を生み出す分子・細胞・ウイルス～ 発表者 桑田昌宏 生命科学研究所

2022-05-16 パンデミック第17回研究会 日本における衛生映画の歴史 発表者 藤本大士 教育学研究科 PD

2022-06-13 パンデミック第18回研究会 近世後期高浜村における疱瘡流行と迫・家への影響 発表者 東昇 京都府立大学 文学部

2022-07-11 パンデミック第19回研究会 日本経済史からみるインフルエンザ・パンデミック—影響と対策 発表者 小堀聡 人文科学研究所

2022-10-17 パンデミック第20回研究会 「マスク」が政治的イシューになるとき：日本における「反マスク派」の形成 発表者 池田さなえ 大手前大学 総合文化学部

2022-11-14 パンデミック第21回研究会 コロナパンデミックが宗教空間に及ぼした影響—日本における仏教儀礼の変貌 発表者 リュウシュ・マルクス 京都女子大学

2022-12-12 パンデミック第22回研究会 Counter culture and Japanese computers: Utopia, and ideology from the 1970s to the Corona-Pandemic 発表者 Till Knautd 人文科学研究所

2023-01-06 パンデミック第23回研究会 害虫化する人間—計算が現実を飲み込むとき 発表者 瀬戸口明久 人文科学研究所

2023-02-13 パンデミック第24回研究会 何が彼らを殺したか—怒りと認識の十九世紀統計史— 発表者 岡澤康浩 人文科学研究所

## 7. 共同研究会に関連した公表実績

香西豊子、藤原辰史、香西豊子、藤原辰史、比較家族史学会『家族と病い』 第2回報告会（2023年3月13日ズーム開催）で報告。／香西豊子「「公衆」衛星の誕生」、藤原辰史「コロナ・パンデミックの歴史的位置」、第3回国立大学附置研第三部会シンポジウム「感染症と近代社会」（2022年10月28日開催）

## 8. 研究班員

所内

藤原辰史、石井美保、直野章子、瀬戸口明久、小関隆、岡田暁生、小堀聡、Till Knautd、酒井朋子

学内

桑田昌宏(生命科学研究科)

学外

香西豊子(佛教大学歴史学部)、東昇(京都府立大学 文学部)、池田さなえ(大手前大学 総合文化学部)、リュウシュ・マルクス(龍谷大学 世界仏教文化研究センター)、新井卓

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数					
		総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	
			(内女性)	(内女性)	(内女性)	(内女性)		(内女性)	(内女性)	(内女性)	(内女性)	(内女性)
人文研所属 (内女性)		9	1		2		61	4		13		
京大内 (人文研を除く) (内女性)		2					13					
国立大学 (内女性)		1					12					
公立大学 (内女性)		3	1		1		33	10		11		
私立大学 (内女性)												
大学共同利用機関法人 (内女性)												
独立行政法人等公的研究機関 (内女性)												
民間機関 (内女性)												
外国機関 (内女性)												
その他 ※ (内女性)												
計		0	15	2	0	3	0	119	14	0	24	0
			(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
※「その他」の区分受入がある場合 具体的な所属等名称を記載：例) 高校教員 無所属の場合は機関数0とカウントし、この欄の記載不要												

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	6		2	
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)	0	(0)	0	(0)
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)				
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	0	(0)	0	(0)
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0		0	

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

	雑誌名(必須)	掲載論文数(必須)	掲載年月日(必須)	論文名(必須)	発表者名(必須)
1	医学史研究(103・104)	1	2023年3月	モラル実践としての公衆衛生——三宅秀『修身衛生講話』にみる転換期の近代「衛生」のかたち	香西豊子
2	法律時報95(1)	1	2023年1月	近代日本における〈予防接種を打たせる論理〉の転回／展開	香西豊子
3	化学と教育70(8)	1	2022年8月	長与専斎と日本における感染症の歴史	香西豊子
4	社会思想史研究(46)	1	2022年9月	政治禍としてのコロナ禍【現場政治の生成】	藤原辰史
5	思想(1183)	1	2022年11月	「たかり」の思想	藤原辰史
6	Technology and Culture 63(2)	1	2022年4月	When Energy Efficiency Begets Air Pollution: Fuel Conservation in Japan's Steel Industry, 1945-60	小堀聡

7	人文學報 119	1	2022 年 6 月	記憶を擁護する —「あり得ない出来事」の記憶を追いながら—	<u>直野章子</u>
8	思想 (1177)	1	2022 年 5 月	〈人間〉を取り戻す——立ち上がる原爆被害者たち (特集:戦争社会学の可能性)	<u>直野章子</u>
9	Journal of Political Ecology 29(1)	1	2022 年 12 月	Living in the forest as a pluriverse: nature conservation and indigeneity in India 's Western Ghats	<u>石井美保</u>
10	Zeitschrift für Religionswissenschaft 30(1)	1	2022 年 6 月	Normierung von Essen in der Jōdo Shinshū: Zum Verhältnis der Norm zur schulspezifischen Lehrauslegung des Buddhismus	<u>リュウシュ</u> <u>マルクス</u>
11	OAG Notizen (5)	1	2022 年 5 月	Amida-Glaube in Nagasaki und Saga: Pilgern und Beten	<u>リュウシュ</u> <u>マルクス</u>
12	京都府立大学学術報告. 人文 (74)	1	2022 年 12 月	近世後期庄屋家妻の病・体認識 —天草郡高浜村上田さほの養生記録—	<u>東昇</u>
13	聖地霊場の成立についての分野横断的研究	1	2022 年 9 月	近世・近代における山城国岩屋山志明院の霊地形成と雲ヶ畑の氏神	<u>東昇</u>

11. 本年度共同利用・共同研究による成果として発行した研究書  
なし

12. 本年度博士学位を取得した学生の数

	人数
博士学位を取得した学生の数	0

13. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由  
なし

#### 14. 次年度の研究実施計画

次年度は、これまでの蓄積されてきた研究をさらに発展させて、再来年度に報告書を作成すべく、メディアと感染症、宗教の感染症、衛生の問題、統計の問題など、議論を深めていく。論文ならびにコラム執筆担当者に一人ずつ発表してもらい、参加者で議論する。また、これまで収集、デジタル化してきた資料についても引き続きデジタル化を進めていく。

#### 15. 次年度の経費

		開催回数	国内出張旅費(延べ人)	支出予定額
国内旅費	研究会参加費	10	5	200000
	一般旅費	5	5	100000
海外旅費	渡航旅費	0	0	0
	招へい旅費	0	0	0
謝金(講演謝金、研究協力者金、その他の謝金)				200000
消耗品等経費				100000
その他				150000
合計				750000

#### 16. 研究成果公表計画および今後の展開等

来年度は月に一回のペースで研究会を開催する。最初に、班長が、報告集のコンセプトについて報告し、そのあと、参加者から論集全体の方向性について意見を徴収する。その後、これまで発表していない二人については二時間かけて報告と質疑応答を行い、すでに発表を一度終えた参加者には、一人持ち時間1時間で、班長並びに副班長との対話形式を試みる。それをビデオに撮影し、HPで公開したい。